近現代日本社会における天皇制とスポーツに関する一考察

權學俊*
kwon@ss.ritsumei.ac.jp

Contents

Ⅰ 序論
Ⅱ 戦前日本における皇室によるスポーツ奨励とその狙い
Ⅲ 戦前日本における明治神宮競技大会と絶対天皇制の再建・強化
Ⅳ 戦後スポーツイベント参加と天皇杯下賜を通した天皇制の地盤強化
Ⅴ 戦後国民体育大会と象徴天皇制の公認と浸透
Ⅵ 結論

Ⅰ. 序論

近代日本の国家像構築の基底をなす「絶対天皇制」の支配構造は、15年戦争を経験しながら強化され、敗戦後も象徴天皇制として生き残り、近現代日本社会の歴史とともに歩んできた。日本社会における天皇制に関する分析も、著しい進展をみせている。特に、昭和天皇の死後、天皇制を歴史化する作業は急速に進んでおり、昭和天皇の戦後史に関する研究、考察する議論は少なくない。

しかし、近現代日本社会における天皇制とスポーツとの関わりについては、明治神宮競技大会に関する歴史学的検討、1920年スポーツを通した思想善導を分析した研究等、若干の成果があるのみで天皇制とスポーツの分析を通して日本社会の特質を分析した研究蓄積は極めて浅い。日本における天皇制研究の側、スポーツ研究の側からこの問題を眺めてみても、天皇制とスポーツ、ナショナリ

＊ 立命館大学 産業社会学部 准教授、近現代日本社会論

교보문고 KYOBO Book Centre

ズムについて正面から総合的に考察した研究はない[1)]。とりわけ、天皇制とスポーツイベントの社会機能に関しては、そのグローバルな影響力にもかかわらず、研究蓄積は浅く、いわゆる cultural studies におけるスポーツ儀礼の研究と歴史研究との理論的懸隔も大きい。単に伝統的共同感情の喚起という機能にとどまらぬ複雑な統合メカニズムを備えたスポーツイベントと天皇制との関わりについての包括的研究は、その意味で、緒についたばかりだと言える。

戦前日本では1920年代からスポーツを通じての天皇制護持のイデオロギー強化への傾斜が明確となり、本格的にスポーツと皇室が深く関わりを持ち始めた。戦前から国家的な儀礼として展開されたスポーツ行事における天皇や皇室によるスポーツ支援には、皇太子裕仁(昭和天皇)、弟の秩父宮、高松宮、澄宮ら皇族が積極的に関わっている。旧「大日本帝国」の外地であった朝鮮、台湾、インドネシア、シンガポール等では、様々なスポーツイベントが開催されたが(特に、朝鮮・台湾)、皇族たちが訪問・支援していることについては、ほとんど知られていない。

戦後にもGHQ占領下から戦時下返納していた「天皇杯」の再下賜や積極的普及、大相撲・野球の天覧試合と国民体育大会の参加等「象徴天皇制」を強化するためにスポーツを利用した点は見逃すわけにはいかない。特に、国民体育大会は戦後日本社会における「象徴天皇制の公認と浸透」を増幅させる装置として、戦後政治のうえに重大な意味をもたらしてきた。

以下、本論では社会的影響力をますます強めている天皇制とスポーツとの関わり合いに焦点を當てて、スポーツイベントのような大衆的象徴儀礼が果たす社会統合・国民統合の極めて特徴的な機能を、天皇制との関わりを通して歴史的

1) 戦後日本社会では長い間、天皇制とスポーツをめぐる問題は研究課題として重要視されてこなかった。天皇制とスポーツとの課題が広く本格的に意識されるようになったのは、この10年くらいのことであり、近年、日本における歴史学・政治学、文化史などの領域でスポーツを通した天皇制再建,強化を考察しようとする研究が少しずつ報告されている。近代日本社会における明治神宮競技大会に関する一部の成果がそれである。しかし、明治神宮競技大会に関する研究もスポーツイベントと天皇・皇族等を総合的に考察した研究ではなく、通史や概説史の中で若干その内容が紹介されるに止まっている。さらに戦争と同化と近代が折り重なるように押しつけられたスポーツを通した身体管理、「国民」づくりと身体規律化の問題についてはいまだほとんど研究がなくその実態が明らかにされていない。

교보문고 KYOBO Book Centre

に究明する学際的アプローチをとりながら考察する。

まず、戦前日本社会における天皇制とスポーツとの関わり合いについて、(1)1920年代から始まった戦前日本における皇室によるスポーツ奨励とその狙い、(2)1924年内務省の発案・主催によって開催された「明治神宮競技大会」と天皇制との関わり合いについて分析していきたい。また、戦後日本社会では、(3)戦後天皇杯下賜と各種スポーツイベント参加を通した昭和天皇の地盤強化、(4)象徴天皇制の公認と強化に大きく貢献した戦後日本最大のスポーツイベントである「国民体育大会」と天皇制との関わり合いについて分析を行う。これらの分析を通して、なぜ、天皇・皇室はスポーツと結びついているのだろうか、そこで作られた天皇像・皇室像とスポーツ像とは何なのかを究明しつつ、近現代日本社会の社会的特質・構造を浮き彫りにする。

Ⅱ．戦前日本における皇室によるスポーツ奨励とその狙い

近代的身体の最も重要な特徴の一つは、身体が国家権力の精密な管理・検査対象になり、より良い身体と健康は訓練によって育成されるということであるが、戦前日本政府が国民の健康と体力を国家政策として本格的に管理し始めたのが1920年代からである[2)]。1920年代から30年代にかけて国民の身体文化への国家的関心は深まっており、1920年代から民間中心に形成されてきたスポーツ・体育を国の政策として取り組もうとする動きが徐々に浮上していた。

日本の支配層は軍事的＝経済的マン・パワー(兵力・労働力)の開発、そして「思想善導」に名を借りた天皇制ナショナリズムを浸透させるために、国家政策の一つの領域としてスポーツ・体育を組み込む必要を意識するとともに、スポーツを媒介にした大衆支配政策を積極的に繰り広げることになる。そうした政策は、既に大正中期の臨時教育会議の「兵式体操ニ関スル建議」や「通俗教育ニ関スル答申」(大正７年)、さらには「民力涵養」政策(大正8年)によって具体化されている。

2) 坂上康博(2001)『スポーツと政治』山川出版社,pp.32-45.中村敏雄他編(1978)『スポーツ政策』大修館書店, pp.62-83.

교보문고 KYOBO Book Centre

つまり、スポーツ・体育を積極的に利用して、各種学校と地方公共団体、青年団、在郷軍人会等と連携協力して、「不平等、不利益を超階級的アイデンティティという体制の主張を支持する方向へと転換」[3]させることであり、中央のみならず、地方や県を包み込む全国ネットワークの確立を通して国家的イベントへの参加を強要し、天皇制ナショナル・アイデンティティの大衆的基盤を形成することであった。例えば、震災後の1924年(大正13年)1月から2月にかけて秩父宮、賀陽宮の臨席のもとに全国体育指導者講習会を開催するとともに、同年5月12日に日本体育連盟が組織されているが、この組織は、民衆体育やスポーツを吸い上げ、第一次世界大戦後における潜在的兵力の確保とナショナリズム高揚を目的とするものであり、それはやがて、その頂点としての明治神宮競技大会の土台を支える下部組織ともなっていく[4]。

この時期、先頭に立ってスポーツを国民に積極的に奨励したのが皇室・皇族である。まず、皇太子裕仁(後の昭和天皇)は、1922年宮内庁のテニスコートで台覧試合と英国皇太子ウィンザー公とのゴルフマッチを行った。さらに、同年11月には第10回全日本陸上選手権競技大会に出席し、十種競技の優勝者に純銀製の優勝カップである「東宮杯」を授与したのである[5]。また、皇太子は野球に積極的な関心を持っており、1922年12月自ら全国中等学校野球大会で史上初の二連覇を達成した和歌山中学を訪れ、ここで初めて野球を観覧する。その後も、皇太子は富士登山などを行うことによって自分がスポーツマンであることを強烈にアピールしていく。この他に當時大衆的な注目度で最も人気を集めていた相撲と東京六大学野球リーグへの優勝カップ、東宮杯の下賜も、皇太子裕仁によるスポーツへの積極的な関わりを強烈にアピールするものであった[6]。

大正天皇の第二皇子、皇太子裕仁の弟である秩父宮は、皇族の中でもスポーツ奨励の最前線に立つスポーツマンとして、皇室によるスポーツ奨励のシンボル

3) ヴィクトリア・デ・グラツィア 高橋進他訳(1989)『柔らかいファシズム』有斐閣, p.258.
4) 入江克己・鹿島 修(1989)「天皇制と明治神宮体育大会第1報」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』31(2), 鳥取大学, p.353.
5) 岸野雄三編著(1999)『近代体育スポーツ年表』大修館書店, p.136.
6) 坂上康博(2000年6月号)「スポーツと天皇制の脈絡—皇太子裕仁の摂政時代を中心に」『歴史評論』, pp.32-33.

교보문고 KYOBO Book Centre

的な存在として様々な活動を展開していく。秩父宮は自らスキーや登山、ボートなどに勤しむだけでなく、中等学校野球戦、学習院の端艇競争大会、全国高校サッカー大会、ラグビー大会など様々な大会を台覧したが、彼の活動の中で何よりも注目しないといけないのが、1923年大阪で開催された第6回極東選手権競技大会の総裁就任と明治神宮競技大会を主催するため1926年新たに新設された「明治神宮体育会」の総裁に就任したことであった[7)]。秩父宮は自らスポーツイベントを本格的に管理・監督し始めたのである。第6回極東選手権競技大会には大正天皇より純銀製の優勝カップ、初の天皇杯が下賜され、皇室による強力な支援体制が実現されていく[8)]。さらに、日本スポーツにおける秩父宮の位置を象徴する出来事が1924年第8回オリンピック大会への積極的な支援であった。日本においてオリンピックに関して日本選手団と政府や皇族の間に密接な協力関係が築かれたのが1924年パリ大会からであるが、1920年アントワープ大会の頃には、「体育に従事して居る民間の遺方は、政府と手を繋ぐとか、政府に頭を下げると云ふことは一種の恥辱であるかの如く考へた人」があり、「又政府はさふ云ふ事業を国務として取扱ふのは不似合であると考へ」[9)]る状況であった。しかし、1924年パリ大会になると、選手団の派遣に政府から6万円の補助金が拠出されたほか、秩父宮による大日本体育協会への「大日章旗」下賜と文部大臣による訓示が行われた。

ここで、一つ注目しないといけないのは、1920年代から日本のスポーツ団体と皇室が深く関わり始めた点である。1911年発足した大日本体育協会は創立以来、スポーツの「政治的中立性」を標榜しながら、国民に運動競技の奨励・指導することを目的としたが、実質的には国際オリンピックへの参加を頂点とするオリンピック種目の統轄組織としての性格をもち、学生及びそのOBによってささえられていた[10)]。しかし、オリンピックに選手を派遣するためには多額の費用が必要となり、財政的確立に苦慮し続けて大日本体育協会は民間団体としての体

7）上掲書，pp.33-34.
8）日本体育協会(1963)『日本体育協会五十年史』pp.38-39.
9）北豊吉(1928)「オリンピック大会と官民の後援」『アスレチックス』第6巻第7号，pp.2-5.
10）森川貞夫(1980)『スポーツ社会学』青木書店，p.18. 権 学俊(2008)「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」『日本語文学』第43輯,日本語文学会，pp.592-600.

교보문고 KYOBO Book Centre

質を「皇室・政府」寄りへ導く原因となったのである。結局、大日本体育協会の第2代目会長となった岸清一は、就任と同時に財政的安定を図るために、協会の財団法人化と皇室・政府に積極的に働きかけた。この頃から皇室・政界との癒着・接近を急速に図っているのである[11)]。1924年パリ大会への日本政府の支援と秩父宮による「大日章旗」下賜は、スポーツを奨励しようとする皇室の思惑とオリンピック選手派遣に財政的に苦しんでいた大日本体育協会の考えがマッチした結果である。

澄宮も野球に積極的な関心を持っていた。澄宮は慶応対大毎野球団の試合を新宿御苑内で開催したり、第1回関東少年野球大会の決勝試合、第1回明治神宮競技大会の試合等を台覧するなど野球熱の高さを次々と披露していった[12)]。

このような皇族たちのスポーツ奨励・スポーツ団体との積極的な関わりは、国民に「国民の皇室」「平和主義の皇太子」といったメッセージを流布し、スポーツを通して皇室と国民の距離を縮め、新しい皇室象をアピールしていった。

しかし、ここで注意しなければならないのは、坂上が指摘しているように、皇室と国民の距離を縮小するといっても、その距離は実際には決して消滅することはなく、むしろ両者の距離が不可侵の境界線によって明確に区分され、皇室の権威が厳然と保たれていたことである。例えば、皇太子裕仁が得意とした乗馬や秩父宮が愛好したスキーや登山、これらは同時に、軍事的な実用性という点でも価値を有するものであり、軍人たる彼らの資質を披露するものであった。また、テニスやゴルフなどは大衆的な文化とは一線を画した上流階級の文化としての気品を有する英国スポーツであった。もっとも大衆性を帯びたスポーツが野球であったが、これを実際に行ったのは、當時小学生の澄宮のみであり、皇太子裕仁が愛好した大相撲も大衆性を帯びてはいたが、これは伝統文化の尊重とい

---

11) 大日本体育協会(1937)『大日本体育協会史』(上)pp.64-85, pp.102-105.大日本体育協会は創立以来、その財源の多くは維持会員に寄付金であり、大会入場料・参加料などの自主財源はわずか1割にすぎず、維持会員464人の中、19人によって全体収入の66%が支えられたのである。森川貞夫(1973)「大日本体育協会『組織改造問題』の一考察」『日本体育大学紀要』第3号, p.19. 権 学俊, 前掲論文「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」, pp.594-595.

12) 坂上康博(1998)『権力装置としてのスポーツ – 帝国日本の国家戦略』講談社, p.51. 澄宮の野球熱については、桑原稲敏(1988)『天皇の野球チーム』徳間書店, pp.60-63.

교보문고 KYOBO Book Centre

う皇室のあり方とも合致するものであったと言えるだろう[13)]。

Ⅲ．戦前日本における明治神宮競技大会と絶対天皇制の再建・強化

明治神宮競技大会[14)](以下、「神宮大会」と略す)は大正期から昭和初期にかけて行われた戦前日本の唯一の総合体育大会である。内務省の発案によって1924年(大正13年)始まった神宮大会は天皇制体制下におかれてきた日本近代の体育・スポーツの総決算であり、昭和天皇をはじめ多くの皇族が深く関わった点からもこの大会を過去のものとして葬り去ることはできない。

早くから青年団管理対策に着々と手を打っていた内務省は、神宮大会が開催される前の1919年から1923年までの間に「明治神宮御造営事業」に全国一道三府四三県、延297団体、16,343人の青年を組織し、神宮大会開催の基盤をつくっていた[15)]。このような準備過程を経て開催された神宮大会だが、内務省は大会の目的について次のよう述べている。

> 明治神宮外苑に築造中の大運動競技場は大正十三年十月を以って、其の工事竣成の筈なりしを以て全国の選手を東京に集め、神前に光栄ある全国一大競技を行ふは啻に明治大帝の御聖徳を憬仰する所以なるのみならず、国民の身体鍛錬並精神の作興上其の効果尠少ならずと信じたるを以て、此の年を始めとし、毎年同神宮例祭を機とし、明治神宮競技大会開催の案を樹て関係方面と打合せ協議を重ね、遂に同年八月之が根本計画確立し、経費として保健衛生及奨励諸費用より金壱万円支出の件も略決定したるを以て、文部省、陸海軍省、地方長官等に対し、左記の通り配慮方を依頼せり[16)]

13) 坂上康博 前掲論文「スポーツと天皇制の脈絡―皇太子裕仁の摂政時代を中心に」pp.39-40.
14) 神宮大会の名称は、第1回と第2回が「明治神宮競技大会」、第3回から第9回までは「明治神宮体育大会」、第10回から第12回までは「明治神宮国民体育大会」、第13回「明治神宮国民錬成大会」に変更した。
15) 熊谷辰治郎編著(1943)『大日本青年団史』日本青年館, pp.137-139.
16) 内務省(1925)『第一回明治神宮競技大会報告書』内務省衛生局, p.1.

교보문고 KYOBO Book Centre

神宮大会は大正期デモクラシー運動に揺らぐ天皇制体制の補強を目的とするものであった。さらに、開会式で内務大臣若槻礼次郎は次のように祝辞を述べている。

> このときに當り毎年明治神宮例祭を機とし、明治神宮競技大会を開催し、広く各般の競技を行はんとするのは、即ち明治大帝の御聖徳を偲び奉ると共に、この機運を促進し、益々斯道の普及を図って、国民の剛健なる精神と身体とを鍛錬せんと欲するに外ならぬのである。一度この挙を発表するや、幸に全国の賛同を得て内地は勿論、朝鮮、台湾、満州等の各地よりも選手を参加せしめ、選抜せられた参加選手の数は三千名を超え、今日この盛観を呈している。これ実に明治大帝の御遺徳の盛なる結果であって(中略)[17]

内務大臣の祝辞からは、この大会が朝鮮、台湾、満州といった植民地を取り組んでおり、侵略政策の一環として開催されたことが確認できる。こうして開会された第１回大会には、選手3,144名をはじめ、皇族のほぼ全員が動員され、各会場に臨席するという徹底ぶりであった[18]。

1925年の第2回大会で注目しておかなくてはならないのは、マスゲーム参加者と観覧者等動員された人数である。報告書によれば、この大会に何らかの形で参加した国民は、50万人に及んでいる。當時日本の総人口が、ほぼ7千万人であったことを考慮にいれると、その影響力は多大なものであったと推測される[19]。この大会には初めて皇太子の臨席と「明治天皇頌歌」によるダンスが行わ

---

17) 上掲書, pp.91-92.

18) 『第一回明治神宮競技大会報告書』は次のように記録している。「十月三十一日 秩父宮殿下 外苑競技場、加陽宮恒憲王殿下 外苑競技場、十一月一日 秩父宮殿下 外苑競技場及相撲場、十一月二日 秩父宮殿下 早大野球グラウンド及帝大テニスコート、澄宮殿下 外苑競技場及早大テニスコート、東伏見宮邦英王殿下 帝大テニスコート、朝香宮妃久女王殿下 外苑競技場、十一月三日 秩父宮殿下 外苑競技場、東伏見宮邦英王殿下 同、山階宮茂磨王殿下 同、北白川宮永久殿下 外苑競技場及柔道場、北白川宮美年子女王殿下 外苑競技場、北白川宮佐和子女王殿下 同、竹田宮恒徳 王殿下 外苑競技場及柔道場」上掲書, pp.94-95.

19) 報告書は「選手は、内地は勿論、遠く関東州、朝鮮、台湾より上京し、其の数五千六百四十六名、これにマスゲーム出場者を加ふるときは三万人に達する状況である。なお地方予選に出場した選手の見込数は約二十万人である。観覧者は正確に算することは出来なかったが、各会場を通じて無慮五十万人に上る見込である」と記している。内務省(1926)『第二回明治神宮競技大

교보문고 KYOBO Book Centre

れた。第2回大会には第１回大会以上に皇族が動員され、各競技場に臨席している。第１回大会と第2回大会には、各競技場に多くの皇族が臨席することによって、天皇や皇族をシンボルとして操り、国体概念の浸透と拡大再生装置として位置づけようとする意図がうかがえる。

神宮大会は1926年(大正15年)の第3回から、主催が内務省から大日本体育協会の役員などを中心に新たに新設された「明治神宮体育会」に移され、名称も「明治神宮体育大会」と改められ、絶対天皇制を強化する措置として機能していった。特に、明治神宮体育会の総裁として「秩父宮」が就任したのは注目すべき点であろう。明治神宮体育会がまとめた神宮競技主催組織大要では、その目的について「一、目的　明治大帝ノ御聖徳ヲ憬仰シ、国民ノ身神鍛錬並に精神ノ作興二資スベキ諸般ノ施設又ハ事業ヲナヲ目的トス」[20]とし、その事業として明治神宮競技会と体育デーの開催を明らかにしている。また、日本内の殆どの権力組織を収斂させることによって、一層その国体主義を強化させたのである。

1929年(昭和4年)第5回大会の特徴は、何と言っても秩父宮の大会総裁就任と「昭和天皇の臨席」である。秩父宮の大会総裁への就任と天皇の行幸によって、神宮大会はさらに絶対天皇制に組み込まれ変質していく。天皇の「行幸」によって神宮体育会は「奉迎部」を設置し奉迎の準備を進めていた。奉迎式は「一、君ケ代奏楽裡に臨席　○君ケ代は軍楽隊奉奏し、一般は之に合唱せざるものとす。○陛下王座に着かせ給う時、君ケ代を奏し終わる如くに奏するものとす。○楽隊は選士の前の位置にあるものとす。○儀礼系の一名は奏楽の合図をなすものとす。二、役員選士及び一般参観者最敬礼をなす。○石川総務委員の指揮によるものとす、役員選士最敬礼し、参観者は之に倣ふ。三、奉迎文捧読。四、一同最敬礼　○指揮者指揮す。五、万歳三唱　○名誉会長の発声により万歳三唱。六、陛下御着席。七、会長役員選士の順序にて退場、この間奏楽す(中略)。○役員は、中央より右向し、左は左向して退場す。選士は指揮者の指揮に従ひ、評議委員に引率せられ、中央より右は右の方に、左は左の方に、各部中央に近き部より退場する」[21]というものであった。大会会長の秩父宮は昭和天皇の大会

会報告書』内務省衛生局, p.3.

20) 宮本昌常(1929)『第三回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会, p.5.

교보문고 KYOBO Book Centre

臨席について、「(中略)本年ハ畏クモ天皇陛下ノ行幸ヲ辱ウスルコトニナリマシタノハ独リ本会ノ栄誉ノミニ止マラズ、我国体育界ニトッテノ空前ノ盛事デアリマス。(中略)」[22]と述べている。

ここで一つ強調しておきたいのは、天皇と多くの皇族が参加した奉迎式とスポーツ試合の開会式は、皇室の絶対的な権威を保持しながら、皇室と国民との間にある不可侵の境界線を国民にアピールする儀礼的空間としても機能していった点である。坂上も指摘しているように、スポーツ大会における奉迎式と皇族によるスポーツの台覧の場は、皇室にふさわしい「荘厳なる場面」でなければならず、その絶対的な権威を傷つけたり、不敬や無秩序を象徴するものであってはならなかった。それは皇室の絶対的な権威を崇め祝福する儀礼的空間であることが義務づけられ、私語はおろか咳払いさえかき消された厳粛な瞬間の到来、直立不動の姿勢、軍楽隊の吹奏に合わせた君が代の斉唱、玉座への最敬礼、奉迎文の朗読、万歳三唱、天皇杯と各種皇族杯下賜などの儀式を差しはさむことによって、皇室への帰服や服従を象徴する機能を果たすような空間として構成されていた[23]。

1931年(昭和6年)第6回大会には今日の天皇杯に相當する「聖恩之旗」が創設されるとともに、この大会より開会式の後、明治神宮遥拝のみならず、選手代表による明治神宮参拝が始まっている。第1回体操祭も開催され、あらゆる階層の国民が巻き込まれることになる。

その後、神宮大会は1937年日中戦争の開始によって、大東亜新秩序建設の喧伝とともに国体主義に加えて軍事色を強めていき、日本政府のスポーツ行政の国家統制、戦争政策の拡大に伴って国家主義的性格をいっそう強めていった。さらに、第9回大会には大会の総裁として皇族・賀陽宮恒憲王が就任した。この大会では「全日本体操祭」が開催され、10,115人もの児童生徒、学生などが動員された。それらを含めると大会参加者は35,866人にものぼっている[24]。

---

21) 宮本昌常(1930)『第五回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会, pp.12-13.
22) 上掲書, p.23.
23) 坂上康博 前掲論文「スポーツと天皇制の脈絡—皇太子裕仁の摂政時代を中心に」pp.40-41.
24) 権 学俊, 前掲論文「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」pp.598-599.

교보문고 KYOBO Book Centre

1939年第10回大会からは、国民体力向上の国家的要請の結果、厚生省主催の政府行事とし、国家総力戦に向けた「国民精神総動員体制」の拡充、強化を目的としていた。さらには、天皇制国家を支えるイベントとして、国家精神総動員運動の体制的な拡充・強化をねらい、神宮大会を機に全国の市町村ならびに府県でも擬似神宮大会(地方大会)の実施を義務づけ、全国民の天皇制国家への絶対掃一を徹底させようとした[25)]。この大会では、秩父宮が総裁に就任しているが、神宮大会のファッショ的再編を象徴するものは、何と言っても二度目の「昭和天皇の行幸」であった。戦時中における昭和天皇の神宮大会参加について報告書は次のように記録している。

> 今回第十回明治神宮国民体育大会を開催するに當たり、畏くも天皇陛下には事変下御多端の折り柄にも拘らせられず、体育御奨励の思召を以て十一月二日本大会に行幸あらせらるゝ旨仰出された。斯くの如きは本会無上の光栄であって、聖慮の洪大無辺洵に恐懼感激に堪へぬ次第である。政府に於てはこの有難き聖慮を全国民に伝達すると共に、この機会に於て益々国民体育の本義を宣揚し、国民体力の増強に格段の力を竭される様地方長官竝各運動団体に通達した[26)]。

また、翌年には海洋競技、銃剣道、さらに次年度には手榴弾なげ・銃剣競技・武装競走・行軍など軍事訓練までを取り入れ、総力戦下、軍国主義的色彩にいろどられたものに変えられていった。神宮大会は1941年からは参加資格として体力章検定合格の要求が加わり、その翌年からは「明治神宮国民錬成大会」と改称し、参加者の呼び名も選手でなく「選士」とあらためられた。このような神宮大会の軍国主義的色彩は太平洋戦争の総力戦体制のもとで強化されていき、文字通り「国家総動員体制」の中に編入される体育大会となった[27)]。

1943年第14回大会を各地方に開催したのを最後に消滅した神宮大会は、対外

---

25) 上掲書, pp.595-602. 入江克己「近代の天皇制と明治神宮競技大会」吉見俊哉他編(1999)『運動会と日本近代』青弓社,p.184.

26) 厚生省編(1940)『第十回明治神宮国民体育大会報告書』厚生省, p.23.

27) 加賀秀夫「日本の総動員体制下の学校体育とスポーツ」世界教育史研究編(1978)『体育史』世界教育史大系31, pp.351-352. 権　学俊, 前掲論文「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」pp.598-600.

교보문고 KYOBO Book Centre

侵略的なナショナリズムを高揚するための一大装置であり、天皇制国家の「国民」の身体と心を形成するための体育大会であり続けた。神宮大会の報告書によれば、中央大会だけでも役員、選手延べ30万人近く、さらに地方予選や神宮地方大会・奉祝駅伝競走のほか、観客、マスゲームなどの参加者を含めると、総勢数千万人とも言われる国民を動員した[28)]。結局、この大会はスポーツを通して各地方と県を含めた全国ネットワークの確立を通じて頂点に神宮大会という国家的イベントに収斂させ、天皇制と軍国主義体制の基盤を形成したのであり、天皇制崇拝の日本ファシズム・イデオロギーへの追従とともに、多くの日本国民を侵略戦争へと駆り出したのである[29)]。

Ⅳ. 戦後スポーツイベント参加と天皇杯下賜を通した天皇制の地盤強化

ポツダム宣言の受諾と無条件降伏によって日本の侵略戦争は終わりを告げ、日本はアメリカ軍の全面的な占領下に入った。占領軍の徹底的な「民主化」と「非軍事化」の方針によって、戦前・戦中、皇室と深く関わりを持ちながら青少年の思想善導、社会思想対策として振興され、軍国主義に協力した日本のスポーツ・体育も強力な改革の対象となった。

しかし、戦後初期昭和天皇と皇族はスポーツを通して、ナショナリズムの高揚だけでなく、象徴天皇制の正統性を周期的に日本国民に客観化することを狙っていた。皇室と国民、皇室とスポーツを深く結びつけたのが、天皇・皇族から下賜された天皇杯と数多くの優勝カップであったが、日本体育協会(以下、「日体協」と略す)をはじめとするスポーツ団体は、戦前の皇室からの賜杯下賜と天皇への忠誠を何等反省することなく、戦後再び逸早くその復活を希望していた。

皇族とスポーツとの関わり・儀礼はスポーツ大会における優勝カップによく表

28) 厚生省偏(1942)『第十二回明治神宮国民体育大会の報告書』厚生省, p.41以下参照.
29) 入江克己, 前掲書, p.171.権 学俊, 前掲論文「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」 p.588.

교보문고 KYOBO Book Centre

れているが、戦前、天皇・皇族から贈られた優勝杯等はかなりの数にのぼっている。1945年１月には日本政府の銀回収運動に呼応して、各スポーツ団体が保有している賜杯などが政府に献納されたが、その際作成された目録には、極東選手権優勝に大正天皇杯一、陸上十種競技に東宮杯一、全国大学高専水上競技大会・全国大学高専陸上競技大会・日米対抗競技などに秩父宮杯四、全日本女子選手権に高松宮杯二、全国学生氷上競技などに久邇宮杯三、スキー選手権に朝香宮杯二、久邇宮杯盃一、計十四が記録されている。

敗戦後、昭和天皇と皇族たちは再び天皇杯と数多くの優勝カップをスポーツ大会に下賜しながら、自分たちの地盤を強化しているが、戦後初めてスポーツ大会における天皇杯下賜のきっかけとなったのが「第1回東西対抗サッカー試合」である。昭和天皇は、1947年4月3日、東京・明治神宮競技場で行われた復活第1回東西対抗サッカー試合に皇太子(現平成天皇)を伴って観戦し、試合が終わった後にグラウンドに降り立ち、選手や協会関係者を激励した。この観戦が日本国内で大きな反響を呼び、宮内庁の働きと尽力によって天皇杯銀杯が昭和天皇から下賜されることになり、翌年1948年7月2日、當時の高橋龍太郎・日本蹴球会会長が宮内庁に出頭、拝受したのである。これは、戦後各種競技へ下賜された天皇杯の中で最初のものであった。それから毎年、天皇杯は東西対抗の優勝チームに授与されていたが、1951年第31回大会から大会名称を「天皇杯全日本選手権」と改め、優勝チームには菊の紋章の入った天皇杯が授与されるようになった。その後、全日本選手権は「天皇杯全日本選手権」として長い歴史を刻むことになった[30)]。

このように敗戦後昭和天皇が国民の視線をあびるオープンな舞台に皇太子を伴って現れた戦後初のケースが、1947年4月明治神宮外苑競技場で行われた復活「第1回東西対抗サッカー試合」の観戦であった。また、戦後初めて天皇一家がオープンな舞台に揃って国民の前に登場したのが、その一ヵ月後明治神宮外苑競技場で開催された「第1回新憲法施行記念都民体育大会」であった[31)]。天皇が戦後初めて皇太子と一家を伴って国民の前に現れるという、この画期的な出来

30）日本サッカー協会(1996)『財団法人日本サッカー協会75年史』pp.218-233.
31）坂本孝次郎(1989)『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社, pp.162-165.

교보문고 KYOBO Book Centre

事は象徴天皇制に照応する新型のパフォーマンスを社会的に印象づけてゆく作戦の展開であり、スポーツ大会が昭和天皇の社会的デビュー舞台として選ばれたことは注目すべきことである。その後も昭和天皇は国体をはじめとする各種のスポーツ大会に積極的に参加し、象徴天皇制の基盤を作っていくのである。

こうしたサッカー大会に天皇が出向いたことに由来して、1948年には国民体育大会はもとより、全日本軟式庭球選手権、全日本卓球選手権他の各大会に「天皇杯」が下賜され、象徴天皇を担ぎ上げるシステムが作られていくが、その中心的役割を果していたのが日体協であった。

日体協は、皇室との関係すべての窓口となり、サッカー協会の天皇総裁問題をはじめとするスポーツ団体における天皇や皇族の総裁・会長問題、天皇杯下賜申請など各種スポーツ団体の賜杯申請の窓口となった。また、日体協は1947年11月19日理事会では、国体の天皇行幸を機として秩父宮を日体協総裁として推戴したいという提案があり、結局了承される。秩父宮はこの時点で陸上連盟、ラグビー協会の総裁も兼務していた。また第2回の国民体育大会の冬(スケート)には高松宮が出席し、翌月、スケート連盟は前竹田宮を総裁とした[32)]。日体協をはじめとするスポーツ団体は、民主化改革が進んでいる過程で民主化とはかけ離れた皇国化方針で天皇と皇族に忠誠を示し、率先して天皇と皇室との接触を求めているのである。

さて、天皇杯の下賜はこれだけではなかった。全日本軟式野球大会にも天皇杯が下賜された。全日本軟式野球大会は第2次世界大戦の勃発により一時中絶状態となったが、1946年第1回全日本軟式野球大会が京都で開催された。その後、この大会は各都道府県代表各1チームの参加で行なわれるようになり、1948年に天皇杯が下賜された[33)]。全日本男子弓道選手権大会にも1960年11月、第11回大会より優勝者に天皇杯が授与され、その他にも全日本レスリング選手権大会、日本の国技相撲にも幕内優勝者に天皇杯が渡されている。また、全日本実業団バレーボール選手権大会、全日本バスケットボール総合選手権大会、ソフトボール大会などには、天皇杯だけでなく皇后杯も下賜されている。

32）内海和雄(1993)『戦後スポーツ体制の確立』不味堂出版, pp.46-47.
33）財団法人全日本軟式野球連盟ホームページ　www.jsbb.or.jp（検索日:2013.11.18）

교보문고 KYOBO Book Centre

このように戦後天皇杯が下賜されたスポーツは少なくないが、「天皇賞」というレースは競馬だけである。皇室と馬のかかわり合いは明治時代から深く、明治天皇は馬の質向上などの目的で競馬の主催者に下賜金を贈っていたが、天皇賞の前身である「帝室御賞典」は1906年(明治38年)までさかのぼる。1906年5月宮内庁はイギリス大使館を通じて日本レースクラブに御賞典(銀製洋盃)を下賜したが、これがいわゆる「帝室御賞典」競走の創始である。1907年1月には池上競馬を初めて開催した東京競馬会にも御賞典が下賜され、帝室御賞典と名付け出走馬を内国産馬に限った。1923年に旧競馬法でも帝室御賞典競走が行われ、年2回同競走が実施されるようになり、1937年日本競馬会の公認競馬にも「帝室御賞典」競走は引き継がれた。1947年春季は平和賞競走(東京競馬場)として施行、同年秋から天皇賞競走として毎年春・秋の2回、京都と東京で行われているのである。宮内庁から帝室御賞典の下賜は、春季は阪神・秋季は東京との内意が伝えられ秋季が日本競馬会における第1回の御賞典競走(1947　年より天皇賞)となったのである[34]。また、スポーツ以外分野である「農林水産祭」にも天皇杯が下賜されている。

優勝カップの提供者は、天皇・皇后に限らない。例えば、軟式野球の大会には高松宮杯や常陸宮杯、秩父宮妃杯が、バスケットボールの大会には高松宮杯、高松宮妃杯などが下賜されている。天皇杯と皇后杯、そして各皇族杯は、現在相當な数にのぼっているが、その大半が1947年から1948年の間に下賜されたものである[35]。

しかし、戦前下賜されたが、戦争のため返納され、戦後再下賜されたスポーツ大会もある。東京六大学野球の優勝カップは、すでに1926年10月に皇太子裕

34) 宇井延(1999)『日本の競馬Ⅰ』近代文芸社, pp.267-268.

35) 戦後日本社会における天皇杯は、1947年6月に日本学生陸上競技連盟(日本学生対校選手権男女総合優勝校)に、同年8月に日本水泳連盟(日本学生選手権男子競泳総合優勝校)と日本テニス連盟(全日本選手権大会男子シングルス)に下賜されている。1948年4月には日本サッカー協会(全日本選手権大会)、同年7月には全日本軟式野球連盟(全日本大会(Aクラス))と日本バスケットボール協会(全日本総合選手権大会男子)に、同年8月には日本軟式庭球連盟(全日本総合選手権一般男子)に、同年10月には日本体育協会(国民体育大会男女総合)に　、同年12月には日本卓球協会(全日本総合選手権大会男子シングルス)に下賜された。天皇杯の多くが1947年から1948年の間に集中的に下賜されていることが把握できる。この点については、日本体育協会(1989)『体協時報』第426号, p.8.

교보문고 KYOBO Book Centre

仁、のちの昭和天皇より下賜され、以降春・秋リーグ戦の優勝校に授与されていったが、太平洋戦争下の1943年4月、文部省から東京六大学野球連盟の解散と共に、宮内省に返納されていたのである。これが戦後直後の1945年10月に六大学OB戦が、11月に明治神宮野球場で全早慶戦を挙行して、1946年5月からは一回戦総當りながら六大学リーグ戦が復活した。天皇杯の再下賜は東京六大学野球リーグで優勝した早稲田大学に渡されたである[36)]。

天皇と皇族たちのスポーツ大会への出席と天皇杯・優勝カップの下賜がもたらす象徴的機能は、天皇にとってはいわば設営された「国民統合の表現舞台」であり、ここに登場することによって象徴天皇制の正統性を周期的に客観化できる役割をはたす。また、スポーツ大会行事への出席に加えて地方視察の機会があり、その機会を通して地域の住民と直接会うことができる。天皇家を社会的に披露する格好の場としてスポーツが選ばれたという事実は、国民統合の歴史の中で、スポーツが占めてきた独自の位置や役割を示唆しているように思われる。天皇・皇后をはじめ皇族が出席するスポーツ大会は、政治的・社会的な国民統合システムの重要な一環を構成しているのである。このようにスポーツ大会における天皇杯や各種皇族杯は、戦前から始まり戦後社会も生き延び天皇制の維持・発展させることとして成り立っている。スポーツ大会と皇室との関係は、戦後の象徴天皇制の中でも親密度をより高めながら現在に至っているのであり、天皇杯はまさにその先駆をなすものであるといえよう。

Ⅴ．戦後国民体育大会と象徴天皇制の公認と浸透

戦後初期日本における体育・スポーツの戦後改革は、何よりも、第二次世界大戦における反ファシズム勢力のファシズムに対する勝利という歴史的社会的背景を受けて、「軍国主義的色彩の払拭」から始まった。このような影響を受け、戦後スポーツ・体育における改革構想のキーワードは「純正なスポーツの復

36）坂上康博，前掲書『スポーツと政治』pp.8-10.

교보문고 KYOBO Book Centre

活」と「大衆化」「民主化」であった。スポーツの大衆化・民主化気運によって、戦中中止された数多くのスポーツ大会が復活され新しいスポーツ大会も誕生した。国民体育大会(以下、「国体」と略す)をはじめとし労働組合体育大会やマッカーサー元帥競技大会などが誕生したのである。その中で、敗戦直後の1946年に第1回大会が始まった以来、2012年岐阜大会まで67回の回数を重ねている日本最大の総合スポーツ祭典である国体は、象徴天皇・皇族とも深いつながりを持っている。

なぜ、象徴天皇・皇族と深いつながりを持っているのだろうか。それは、国体が出発當時から戦前軍国主義的体育思想の下、日本国民を戦争へと動員させる一翼を担わせた神宮大会と深く関わっているからである。GHQの「純粋なスポーツの復活」と「大衆化」方針によって国体は出発したものの、国体は出発當時から神宮大会に深く関わった人々が開催の中心的役割をしており、天皇・皇族とも深く関わっていた。国体開催の背景には、天皇制ファシズムの形成・強化に協力した戦時スポーツ体制の典型といえる神宮大会への郷愁が強く残っており、それゆえ国体が神宮大会の性格、つまり「天皇制イデオロギーの装置」としての性格をある程度有していたことは否定できない。日体協は戦前の軍国主義に協力した誤った歴史の「反省」から大衆化の理念を掲げて国体を開催したものの、国体開催構想の裏面には戦前の神宮大会への郷愁があり、国体開催を神宮大会の再開と受け止める人々が大勢存在したのである[37)]。しかも、国体は開催準備段

37）戦前の神宮大会は戦後国体と深い関連を持っているのを把握できる。戦後における国体の政治性、つまり象徴天皇や皇族とのかかわり方を見るとき、そこには戦前の神宮大会が眼前にちらついてくるのである。国体の創始の過程を見ると、神宮大会の創設の過程とあまりにも酷似している。国体開催にあたって、中心的活動をした大日本体育会のメンバーは平沼、末弘、清瀬三郎、久富達夫、石田らであったが、平沼、末弘、久富の3人は神宮大会の役員をしており、特に平沼、末弘二人は神宮大会の最初からかかわっていた人で、平沼ははじめ顧問となっていたが、明治神宮体育会が組織されてからは副会長に就任した人物であった。末弘は準備委員として入り、最初の計画から参加した人物であった。こうしてみると、明らかに神宮大会と国体は人的にもつながりがあり、しかも国体の発想のモデルとなっているといえる。結局、神宮大会と国体の共通性格は、第一に、神宮大会の中心的人物が国体創始の重要な役割をし、人的にも発想としても同じであったこと、第二は、両大会とも皇室と密接な関係にあったこと、第三に、両大会とも、単に「スポーツ精神」の重視を至上とすることには消極的で、「体力向上」と「精神の作興」が付加されていたことであり、戦後「国体」は、戦前神宮大会が持った理念を維持したまま、名前だけ変え生まれたのである。戦前と戦後の連続性を把握できるところである。

교보문고 KYOBO Book Centre

階から戦禍にあえぐ国民、特に青少年に民族愛の表徴としてスポーツを浸透させ、進駐軍に対して民族の気概を示す、ナショナリズム高揚の道具として企画された。

国体は1947年第2回石川国体から象徴天皇とかかわりをもつようになってから、極めて「政治性」の高い行事となる。国体は「戦後巡幸の一環」として組み込まれてゆくことになり、非公式ながら国体史上初めて天皇が出席した。国体は天皇の国体出席、「日の丸」掲揚「君が代」斉唱など公民啓発運動の一翼を担う政治性の強いセレモニーをともなうことになり、ナショナリズム高揚を通した民族再建の役割を果たしていくのである[38)]。

では、なぜ、この時期昭和天皇は国体に参加したのであろうか。敗戦後、昭和天皇は1946年1月に自ら「神格否定」の宣言を行なうと共に、1946年2月から地方巡幸を開始した。昭和天皇の地方巡幸の目的は、(1)戦後復興・再建の激励の儀式を全国各地で順次催してゆくこと、(2)戦争にまつわる国民の諸種の感情や欠損を慰撫し、相互の和解を招来することによって戦争責任の心理的解消をはかっていくこと、(3)占領軍の意向への儀礼的応答として、また明治天皇の現戦略(天皇の存在と威光を認知させてゆくための明治初期の巡幸)にならって、戦後の新しい前様式を披露し、実験してゆくこと、(4)こうして新憲法の制定に伴う天皇の地位変容にみあった関係儀礼や関係表現の制度化を進めてゆくために、各地を回って象徴天皇制の社会的批准式を行い、もってその社会的正當性を客観化してゆくことにあった[39)]。昭和天皇の地方巡幸は戦後復興と再建の激励を儀式として、全国的に実施することによって戦争による国民感情を慰撫するとともに、戦争責任の心理的な希薄化を図り、明治初期の巡幸を戦後において再現し、新憲法の制度にともなう象徴天皇の社会的正當性を客観化していくことであったのである。さらに、昭和天皇が巡幸を開始したこの時期は、まだ東京裁判の開廷前で、憲法もどうなるか分からず、天皇の身体とその制度は先行きがはっきりしない、きわめて不安定な状態であった。そのため昭和天皇は地方

38) 日本体育協会(1998)『国民体育大会50年のあゆみ』p.214.
39) 坂本孝次郎(1988)『象徴天皇がやってくる』平凡社, pp.95-96. 権 学俊(2009)「国家権力装置としての国民体育大会に関する一考察」『日本文化研究』第32輯,東アジア日本学会, pp.25-44.

교보문고 KYOBO Book Centre

巡幸を通して自分の基盤・位置を確保し、日本国民から圧倒的に支持されている姿をGHQに演出しなければならなかった。その一つの方法が国体の参加をはじめとする様々なスポーツ大会への参加・天皇杯下賜を通したスポーツへの積極的な関与であったのである。

その後、第3回福岡大会から国民体育の普及奨励を目的に「天皇杯」と「皇后杯」が授与され、さらに1949年の第4回東京大会には国体史上はじめて天皇・皇后がそろって開会式へ出席し、国体における初めての「お言葉」を述べた。ここに象徴天皇制が登場し、浸透する道が開かれることになり、1950年の第5回愛知大会からは天皇出席が正式決定されている。象徴天皇制の国民統合の表現舞台の一つが国体にやがて制度化されていったこととあわせて、天皇行幸が極めて戦略的に演出されていることを物語っている[40)]。民主的な、国民的なスポーツ大会をめざした国体が、次第に象徴天皇制を心理的、情緒的に許容させ浸透させる機能を果たすようになったのである。そして、1955年には「国民体育大会開催基準要項」が制定され、天皇が臨席することが規定されるのである。

国体を開催するにあたってその基準を規定したのが「国民体育大会開催基準要項」であるが、この規定が天皇の国体出席の根拠になっている。この要項をみると、十八番目に「大会の式典」[41)]の規定が定められているが、この規定には「式典はできるだけ簡素なものとして、次の項目を必ず式典中に取り入れるものとする」と書いてあり、秋季大会の開会式は、(1)開会宣言、(2)国体旗引継、(3)国旗掲揚、(4)大会旗、実施競技団体旗及び参加都道府県旗掲揚、(5)大会会長あいさつ、(6)文部大臣あいさつ、(7)開催地都道府県の歓迎の言葉、(8)天皇陛下お言葉、(9)選手代表宣誓の順になっている。閉会式では、(1)成績発表、(2)表彰状授与、(3)天皇杯及び皇后杯授与、(4)大会会長挨拶、(5)国旗降納、(6)大会旗、実施競技団体旗及び参加都道府県旗降納、(7)閉会宣言になっている。従って、他の項目のところでは、天皇が来なければいけないという項目がないのだが、式典のところに規定があることである。

国体が天皇中心であるという感じを受けるのが開会式典のプログラム内容で

40）坂本孝次郎,前掲書『象徴天皇制のパフォーマンス』p.163.
41）日本体育協会,前掲書『国民体育大会50年のあゆみ』p.372.

교보문고 KYOBO Book Centre

ある。開会式での関係者はいずれも天皇へ向って頭を四十五度に下げ、発する文句は「天皇陛下のご臨席を仰ぎ」という言葉に始まって、「天皇陛下のご壮健をお祈りする」という言葉で終っている。開催都道府県知事も日体協の会長も、関係市町村の長もそういう言葉を慣例的に使っていることである。このように国体は天皇色の色彩の強い開会式をともなって行われる。1965年岐阜国体からは、国体史上はじめて開会式プログラムに「天皇・皇后両陛下万歳三唱」が入り、国体が天皇色の色彩の強い開会式をともなって行われていることを証明した。岐阜国体では、昭和天皇の「お言葉」後、大会会長答辞が続けられ、その後大会会長の発声で万歳三唱が正式的に行われたのである。天皇が退席する時も君が代演奏と共に、万歳三唱が実施された。結局、開会式では二回にわたって正式的に「天皇・皇后両陛下万歳三唱」が行われたことになる[42)]。「天皇・皇后両陛下万歳三唱」は岐阜国体から開会式に正式に採用され、1974年千葉国体まで続けられた。岐阜国体では、君が代の斉唱、日の丸の掲揚に加えて、「天皇・皇后万歳」が叫ばれ天皇崇拝をあおり、国家主義宣伝を強めていた。このように国体には天皇がその中心にあるのである[43)]。

また、国体では地元開催県が総合優勝し天皇杯を獲得し続けるようになるが、ハンを押したような開催県の総合優勝による「天皇杯」獲得は1964年大会から2012年大会まで2002年高知国体一回を除いて約50年も近く続いている。不思議といえば不思議な話だが、すべてまぎれもない事実である。では、なぜ国体でこのような異常がまかり通ってきたのか。答えは簡単である。1964年の国体から開催県が圧倒的に有利になるよう大会参加方式や得点獲得方式、そして対戦相手の組み合わせまでが不公平に変更されたからである[44)]。

なぜ、毎年開催県を「八百長」で優勝させ天皇杯を開催権に下賜するのだろうか。それは「天皇・皇后がありがたくも、主催地をたたえてくださる」といった名誉ある儀式を、全国的に展開する必要が支配層にあると考えられる。名誉な権

42) 第20回国民体育大会岐阜県実行委員会事務局(1966)『国民体育大会報告書－第20回』pp.25-27.
43) 権 学俊,前掲論文「国家権力装置としての国民体育大会に関する一考察」pp.25-44
44) 開催県有利の仕組みの第一は全種目にフルエントリーできる制度、第二は開催県のチームが上位進出できるように配慮する地元有利の組み合わせ、第三は開催県の強力的な選手強化策の実施等である。

교보문고 KYOBO Book Centre

威づけのための儀式の主役はもちろん「天皇」である。国体の妙味は、天皇杯・皇后杯が必ず主催都道府県の掌中におさまり、それを通じて、皇室と地方との結合のきずなが強化されるところにある。国体は開催県を「八百長」で優勝させ、地域に天皇杯と皇后杯をおしつけていくシステムと同時に、政治装置としての象徴天皇制にまことにふさわしい行事でもある。

Ⅵ. 結論

本稿で検討してきたように、戦前日本では1920年代から本格的にスポーツと皇室が深く関わりを持ち始めた。戦前から国家的な儀礼として展開されたスポーツ行事における天皇や皇族の出席、天皇杯をはじめとする数多くの皇族優勝カップ下賜、各競技団体への下賜金授与や大日章旗下賜、1924年神宮大会の設立と支援、台覧競技参加等、皇室によるスポーツ支援には、皇太子裕仁、秩父宮、高松宮、澄宮ら皇族がスポーツ活動を積極的に行うことによって果されている。戦前スポーツイベントは、天皇制と国家的な秩序への同意を強化し、国家との一体感を推し進める装置として巧妙に機能していった。

戦後にもGHQ占領下における「東西対抗サッカー大会」「新憲法施行記念都民体育大会」の参加、戦時下返納していた天皇杯の再下賜や積極的普及、大相撲・野球の天覧試合観戦等、全国障害者スポーツ大会の支援、「象徴天皇制」を強化するためにスポーツを利用した。また、昭和天皇のみならず、多くの皇族がスポーツ協会・連盟の総裁として活動していた。国体も昭和天皇・皇族と深く関わりを持ちながら、純粋なスポーツ大会としての性格から逸脱し、戦後日本社会における「象徴天皇制の公認と浸透」を増幅させる装置として、戦後政治のうえに重大な意味をもたらしてきたことも、また無視できない事実である。天皇制と「国体」といえば、もっぱら「万世一系」の「現人神」といったあの「国体イデオロギー」の方が問題にされ、スポーツ大会の方が問題にされるようなことは戦後史の中でも、ほとんどなかった。

교보문고 KYOBO Book Centre

しかし、かの「国体イデオロギー」はスポーツ大会「国体」を一つの媒介として戦後に延命し、再編成されたのである。国体は非政治性をよそおいつつその政治性を貫徹する象徴天皇制にこそふさわしいイデオロギー装置だといえよう。

さらに、天皇と皇族はオリンピックとも深く関わっている。戦後日本で開催した東京オリンピック・札幌オリンピック・長野オリンピック等にも深く関わっているのである。最近は東京オリンピック招致に関して、IOC委員を皇太子が東京で歓迎してみせた。東京五輪が決まる直前のIOC総会では、東京のプレゼンテーションの冒頭、高円宮妃久子がフランス語と英語でスピーチを行ったのである。このように天皇・皇族は様々なスポーツ大会と関わり合いを持ちながら、象徴天皇制の基盤強化を図るとともに、国民の距離を縮め新しい皇室像をアピールしていった。

本稿では、オリンピックと皇族とのかかわりについて分析できなかったが、オリンピックは天皇制とスポーツを語るうえで重要な分析の対象に違いない。近現代日本社会で社会的に影響力の強い天皇制とスポーツとの分析を通じたナショナリズムの検討は、単にナショナリズムの理論研究にとどまらぬ社会分析として、日本社会の社会的特質を明らかにするうえで大きな意義を持つ。また、現代的な社会統合の一環をになうナショナリズムの機能、特に天皇制とスポーツを通じたナショナルな統合機能に関する研究成果が少ないことに鑑み、研究としての先進性、独創性も大きい。今後、戦前から切っても切れない関係にある天皇制とスポーツとの関係についてさらに分析をすすめていきたい。

교보문고 KYOBO Book Centre

참고문헌

入江克己 「近代の天皇制と明治神宮競技大会」吉見俊哉他編(1999)『運動会と日本近代』青弓社, p.171, p.184.
入江克己・鹿島　修「天皇制と明治神宮体育大会第１報」(1989)『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』31(2), 鳥取大学, p.353.
内海和雄(1993)『戦後スポーツ体制の確立』不昧堂出版, pp.46-47.
宇井延(1999)『日本の競馬Ⅰ』近代文芸社, pp.267-268.
加賀秀夫 「日本の総動員体制下の学校体育とスポーツ」世界教育史研究編(1978)『体育史』世界教育史大系31, pp.351-352.
岸野雄三 編著(1999)『近代体育スポーツ年表』大修館書店, p.136.
北豊吉(1928)「オリンピック大会と官民の後援」『アスレチックス』第6巻第7号, pp.2-5.
権 学俊(2008)「戦時下日本における国家主義的な身体管理と「国民」形成に関する一考察」『日本語文学』第43輯,日本語文学会, pp.579-602.
_____(2009)「国家権力装置としての国民体育大会に関する一考察」『日本文化研究』第32輯,東アジア日本学会, pp.25-44.
熊谷辰治郎 編著(1943)『大日本青年団史』日本青年館, pp.137-139.
桑原稲敏(1988)『天皇の野球チーム』徳間書店, pp.60-63.
厚生省編(1940)『第十回明治神宮国民体育大会報告書』厚生省, p.23.
_____(1942)『第十二回明治神宮国民体育大会の報告書』厚生省, p.41.
坂上康博(1998)『権力装置としてのスポーツ-帝国日本の国家戦略』講談社, p.51.
坂上康(2000年6月号)「スポーツと天皇制の脈絡-皇太子裕仁の摂政時代を中心に」『歴史評論』, pp.32-34, pp.40-41.
坂上康博(2001)『スポーツと政治』山川出版社, pp.8-10, pp.32-45.
坂本孝次郎(1988)『象徴天皇がやってくる』平凡社, pp.95-96.
_____(1989)『象徴天皇制のパフォーマンス』山川出版社, pp.162-165.
大日本体育協会(1937)『大日本体育協会史』(上)pp.64-85, pp.102-105.
第20回国民体育大会岐阜県実行委員会事務局(1966)『国民体育大会報告書－第20回』pp.25-27.
内務省(1925)『第一回明治神宮競技大会報告書』内務省衛生局, p.1, pp.91-93.
_____(1926)『第二回明治神宮競技大会報告書』内務省衛生局, p.3.
中村敏雄他編(1978)『スポーツ政策』大修館書店, pp.62-83.
日本サッカー協会(1996)『財団法人日本サッカー協会75年史』pp.218-233.
日本体育協会(1963)『日本体育協会五十年史』pp.38-39.
_____(1989)『体協時報』第426号, p.8.
_____(1998)『国民体育大会50年のあゆみ』p.214.
宮本昌常(1929)『第三回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会, p.5.

교보문고 KYOBO Book Centre

_____(1930)『第五回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会, pp.12-13, p.23.
森川貞夫(1973)「大日本体育協会『組織改造問題』の一考察」『日本体育大学紀要』第3号, p.19.
_____(1980)『スポーツ社会学』青木書店, p.18.
財団法人全日本軟式野球連盟 ホームページ（www.jsbb.or.jp）

❖ 투고일 : 2013.12.30
❖ 심사완료일 : 2014.02.06
❖ 게재확정일 : 2014.02.10

KYOBO
교보문고

교보문고 KYOBO Book Centre

Abstract

近現代日本社会における天皇制とスポーツに関する一考察

権学俊

本稿は近現代日本社会における天皇制とスポーツとの関わり合いの分析を通して日本社会の特質を明らかにすることを目的とする。1920年代から日本政府と皇室は国民の身体とスポーツに強い関心を持ちスポーツイベントと体育運動競技を国の政策として取り組んだ。これは広い意味での国家総動員体制に向けて、国民精神とともに国民身体を国家の管理のもとにおき、動員していこうとする動きであった。1924年から開催された明治神宮競技大会は天皇制「国体」護持のイデオロギー強化、スポーツによる「思想善導」の目的を持つ戦前代表的なスポーツ大会であった。スポーツを国民に積極的に奨励・支援したのが皇室・皇族であった。皇太子の東宮杯の下賜、極東選手権大会への天皇杯の下賜と秩父宮の総裁就任、大日本体育協会への大日章旗の下賜、明治神宮競技大会の開催などは、こうした皇室のスポーツ政策の一端を担うものであり、皇室と国民との新たな関係を創出していこうとするものであった。それは皇室の伝統を破棄し天皇・皇族の人間的な魅力を打ち出していくものであった。

さらに、戦後初期昭和天皇と皇族は、「第一回東西対抗サッカー試合」や「第一回新憲法施行記念都民体育大会」等参加、スポーツ大会への天皇杯と数多くの優勝カップ下賜を通して、象徴天皇制と自分たちの地盤を強化していった。特に国民体育大会は、象徴天皇・皇族とのつながりによって強い「政治性」を内包しながら、今日まで続けられてきた。近現代日本社会において、絶対天皇制と象徴天皇制の基盤を強化・確立していく過程の中で、明治神宮競技大会・国民体育大会をはじめ、各種スポーツイベントが果たした社会統合メカニズムの役割は大きい。スポーツ大会は、政治的・社会的な国民統合システムの重要な一環を構成しているのである。天皇・皇族は様々なスポーツ大会と関わり合いながら、天皇制の基盤強化を図るとともに、国民の距離を縮め新しい皇室像をアピールしていったと考えられる。

Key Words：天皇制(Emperor System)、皇室(Imperial Household)、スポーツ(Sports)、明治神宮競技大会(Meiji-Jingu games)、国民体育大会(National Sports festival)

교보문고 KYOBO Book Centre